



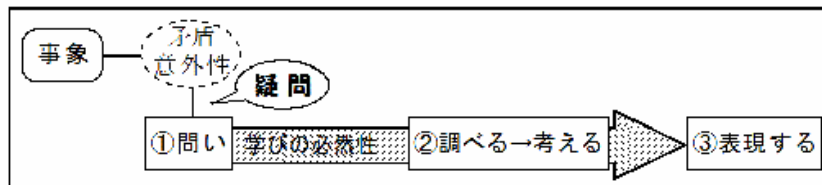
新年度が始まって、3週間が過ぎました。新しい学級の準備やたくさんの行事のために、特に慌ただしい時期ですので、お疲れのことでしょう。

今年度も、研究推進再スタートにあたり、広島大学大学院 木村博一先生にご講話いただきました。「アクティブラーニング」と「多面的・多角的な思考」をキーワードに、主体的な授業づくりと多面的・多角的な教材分析についてお話いただきました。今回の講話の論理展開、特に、単元展開例で示された授業の内容がハードだったので、写真を撮ることを忘れるほどに聞き入ってしまいました。先生方は、いかがだったでしょうか。

さて、今回は、私がこの研修会で考えたことを、「主体的」な授業づくりと「多面的・多角的」な思考の2点からまとめたいと思います。

1 子どもの「主体的」な授業づくりとは

子どもが主体的に学ぶ授業とは、事象から問いを見つけ、それについて調べ、考えたこと



[資料1：子どもの「主体的」な授業]

を表現するという一連の思考活動でイメージできるでしょう。これを図示すると、[資料1]のようになります。

まず、目の前の事象・事実から、疑問や課題意識を感じ、問いを導き出します。人は、事象や事実の矛盾点や意外性のある点に気付いたとき、疑問を感じます。それが学ぶ必然性になるのです。(①)

感じた疑問を原動力として、次に、問いについて考えるために必要な情報や事実を集めます。そして、集めた情報や事実を整理、解釈して、理由付けや意味付け、価値付けをして、問いに対する考えを持ちます。(②)

さらに、思考した過程や結果を表現することによって、学びを明文化してまとめとともに(再構成)、子ども相互の意見交流を展開して、思考・考えを深めたり、次の疑問を見つけたりします。(③)

「アクティブ・ラーニング」の「アクティブ(=活動)」とは、このような思考活動ととらえるとすっきりするのではないのでしょうか。ここでいう「主体的」とは、子どもが疑問を感じて問いを自覚し、子どもの探究心・好奇心が原動力となって、問いについて探究・解決しようとすることを意味しています。事象も問いも思考も、すべて子どもに丸投げにしまっては、何の筋道もない思考と議論を展開する、まさに、子どもが「はいまわる」探究になってしまいます。

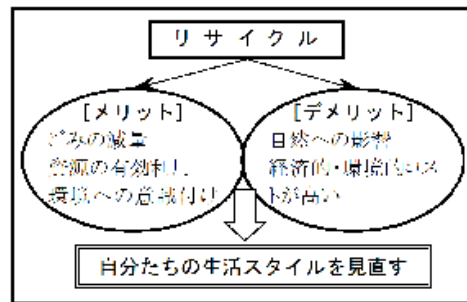
「総合的な学習」が導入された際、「自ら問いを見つけ、自ら考える」をキーワードに、教師の意図や仕掛けなしに、子どもたちにテーマや事象が示され、闇雲に調べて、発表するという、活動主義的な学習が多く展開されました。その結果、内容も、ものの見方・考え方も、総合的な学習のねらいの中心である学び方も習得できず、総合的な学習のあり方の見直し、削減という事態を起しました。

事象から「問いに至る手立て」と集めた情報・事実を筋道を立てながら結論付ける「考え方」を設定して、子どもが主体的に思考する授業を意図的に仕組むことが必要です。これによって、問題を発見する力、考え、判断する力、それらを表現する力を育て、自立した探究活動ができるようにすることが必要なのです。

2 「多面的・多角的」な思考を展開するための手立て

「多面的・多角的」な思考とは、一つの事象やテーマについて、より広いところに目を向け（見方）、いろいろな解釈し、とらえ方や概念を広げる（考え方）ことと考えられます。このような思考を展開するための教材解釈や単元づくりをする上で、次の三つの着目の仕方が考えられるでしょう。

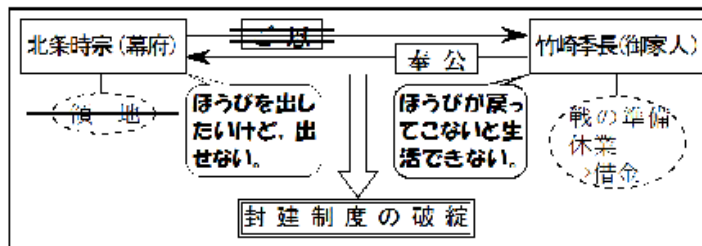
一つ目は、見えている部分としての「表」と見えない部分としての「裏」に着目することです。具体的には、メリット・デメリットや長所・短所などです。例えば、4学年の「ごみのしまつ」において、「リサイクル」を取り上げるとします。その際、ごみ減量のため



[資料2:「リサイクル」の着目点]

の手立てや資源の有効利用というメリットとともに、自然への影響や経済的・環境的コストの高さというデメリットから迫ることによって、自分たちの生活スタイルを見直す必要性に気付く展開が考えられるでしょう。([資料2])

二つ目は、視点を替えることです。例えば、6学年の「武士の世の中」において、「元寇」を取り上げるとします。その際、幕府のために奉公したにもかかわらず、ほうびがもらえなかったとい



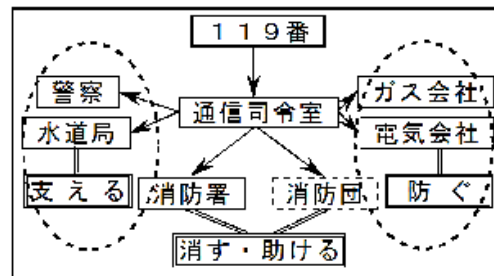
[資料3:「元寇」の着目点]

う竹崎季長側（御家人）側からと、領地をとっていないために、ほうびを出さなかったという北条時宗（幕府）側から迫ることによって、鎌倉幕府が滅びたのは、「ご恩と奉公」という封建制度が破綻したことにあるというように、身分・税制といった社会制度からとらえる展開が考えられます。([資料3])

三つ目は、一つのテーマに多方向から迫ることです。先般研究推進計画でお示した27年度5学年「白島ぶらん」は、「すごいぞ！人間の底力」をテーマに、様々なところで生きる人々の生きる姿から、多様な人間の力が社会を創り、動かしていることに迫

ります。また、人間の力が技と知恵を生かし、高めながら、社会を豊かにすると同時に、公害や自然破壊など、社会を壊す問題をもたらした事実を取り上げ、社会のあり方と「豊かさ」の追求の仕方を見直す学習へと認識をひっくり返す展開が考えられます。

これらの着目の仕方のよりどころは、教材・内容の構造です。研究推進計画でも示した3学年「あんぜんなくらしを守る」を例に考えてみます。この単元は、「消防」を取り上げ、関係諸機関の連携に気付くことが貫く内容です。〔資料4〕。この構造から、「119番通報」から先で働いてい



〔資料4：「あんぜんなくらしを守る」の内容構造〕

る様々な機関と働きを、通報から消火活動までのプロセスで調べる学習が考えられるでしょう。その際、「警察」や「ガス会社」とのつながりに迫ることによって、消火・救助以外の働きを気付くことができます（部）。また、消防団（部）と他の機関との違いから、地域の人々が地域を守っているというように、地域の安全には、「公助」ばかりでなく、「共助」が寄与していることに気付くことができます。これを通して、関係諸機関の連携の認識を深めていくことができると考えられます。

構造化というと、一見、難しいように思われます。以前、板書のうまい先輩の先生に、「学習内容を絵に描くように考えてごらん。」とアドバイスされたことがあります。構造化は、頭の中の認識を絵のように描くと考えられるのかもしれませんが。

なかなかゆっくりとお話ができない中で、何とかして、先生方と学びを共有化したいと思います。そこで、全国大会終了後ご無沙汰でしたが、懲りることなく、「徒然なるままに」書かせていただこうと思います。もしかしたら、かえって、分かりにくい内容になるかもしれませんが、お付き合いいただければ幸いです。授業づくりや社会科について、困ったことや相談などありましたら、いつでも声を掛けてください。いっしょに考えましょう。少し余裕が出てきたら、先生方の授業を見せていただきに、教室に伺いたいとも思っています。